

# ぐんま国際アカデミー・女子高校生ヘアドネーション同好会の熱意 子どもたちへ 幸運のウィッグを届ける

がん治療などで髪の毛を失った子どもたちへ、医療用かつらを無償で贈ろうと活動している、ぐんま国際アカデミーの女子高校生ヘアドネーション同好会。高校生たちの熱意は学校や企業、病院を動かし、全国からも多くの頭髮寄付が届くようになった。



◀全国から寄せられた頭髮。髪質やカラーの有無は問わないが、かつらの製造課程をスムーズにするため、ゴムで留めてからカットした髪を送ってほしいという

## 頭髮寄付の普及を目指し 走り始めた二人の姉妹

今年3月、群馬大学医学部附属病院に入院している少女のもとへ、オーダーメイドの医療用かつらが届けられた。無償提供に尽力したのは、ぐんま国際アカデミーの在校生を中心に活動する、女子高校生ヘアドネーション同好会だ。ヘアドネーションとは、小児がんや事故などで頭髮が失われた子どもたちへ、寄付された髪の毛で作った医療用かつらを無償で提供するボランティア活動。日本では2009年、最初のNPO法人が立ち上げられ、存在を知られるようになった。

同会が発足したのは、2017年4月。代表を務める高校3年生、伊谷野真莉愛さん、とある行動がきっかけだった。「中学2年生の頃、小児がんと闘っている子どもたちのドキュメンタリー番組で、ヘアドネーションの存在を知りました」と話す真莉愛さん。さっそくインターネットで頭髮寄付の方法を検索し、かつらの制作には髪の毛の長さが31センチメートル以上必要だと調べた。その後、2年間で伸ばした髪を高校1年生の4月に切り、NPO法人へ寄贈。さらに、2歳年下の妹、友里愛さんと学校に所属しない同好会を立ち上げ、SNSで全国の女子高校生へ呼びかけよう

と動き始めた。一方、伊谷野さん姉妹は、校内でも仲間を集めたいと奔走。しかし、学校公認の同好会となるには、さまざまな手続きが必要だ。メンバー集めや顧問の先生探し、活動場所、髪を郵送する費用など、課題は山積みだった。さらに、一つひとつの問題を解決しようと頑張っていた二人へ、予期せぬ試練が襲いかかる。協力を申し込んでいたNPO法人との連絡が途絶え、集めた髪の毛の寄贈先を失ってしまったのだ。



一束ずつ髪の毛の長さを計りながら、仕分け作業を進める女子高校生ヘアドネーション同好会のメンバー

フリモARでメンバーの活動を紹介します

## 女子高校生 ヘアドネーション 同好会の メンバーたち



顧問 カスタネーダ・リン教諭 阿部千里さん 宮崎莉歌さん 伊谷野友里愛さん 代表 伊谷野真莉愛さん

てくれるメーカーを探そう」と、友里愛さんと励まし合い、二人は行動開始。頭髮寄付をしてくれた人々の思いに応えたいと、走りだした。

## 一人でも多くの子どもへ 医療用かつらを届ける

病気で髪を失った子どもたちが、笑顔で外出できるようにしてあげたい。熱意と勢いだけで動き始めたものの、普通の高校生が無償でかつらを作ってくれるメーカーを探すのは困難だった。

伊谷野さん姉妹は、約30社の企業に協力依頼の電話をかけたが、ほとんど話しすら聞いてもらえない。それでも、根気よく電話をかけ続けると、大手メーカーから「検討してみます」と返答が



医療用かつらを作るために、安らげながら髪の毛を採寸する伊谷野真莉愛さん。小学校1年生の少女をかぶって学校へ行きたいと、楽しみにしている

きた。20年前から子どもたちに無償で医療用かつらを贈っている、株式会社アートネイチャーだ。昨年7月、同社の広報担当者がわざわざ東京から来校。医療用かつら寄贈の実現へ向けて、相談に乗ってくれたという。二人の熱い思いが、企業へ伝わったのだ。

医療用かつらの制作が実現可能となると、次の難題は協力してくれる病院探しだ。真莉愛さんが偶然ラジオ番組で対談した、清水聖義太田市長に相談すると、県内の病院へ声をかけてくれたという。かつら提供の申し出を、小児がんの治療へあたっていている群馬大学医学部附属病院と群馬県立小児医療センターが、快諾。夢へと大きく近づいた。

「化学療法で髪を失うと、退院しても恥ずかしくて学校へ行けないという子が多いのです」と、群馬大学医学部附属病院小児科の飯島真由子医師は話す。医療用かつらは、闘病中の子どもたちにとって、自信を持って社会復帰するための心強い味方なのである。



群馬大学医学部附属病院小児科 飯島真由子医師

真莉愛さんたちの活動は、校内の自主制作映画でも取り上げられ、多くの反響を呼ぶ。映画制作に関わった2年生の宮崎莉歌さんは、「映画の制作を機に、私も協力したいと思いました」と。同好会は、インターネットを通して参加

した他校のメンバーも含めて23人。今年4月からは、カスタネーダ・リン教諭が顧問になり、学校所属の同好会となった。「かつらを受け取った子どもたちはきつと見た目だけの変化がうれしいわけではないのです」と、カスタネーダ教諭は話す。自分のために、大切な髪をくれる人がいる。人々の善意が、病氣と闘う気持ちを強くしてくれるのだと、ほほ笑んだ。

これまで同会が集めた頭髮は、約100人分にも及ぶ。幸運のウィッグと名付けた医療用かつらは、念願の第1号に続いて現在、第2号、第3号の制作が進行中だ。しかし、1人分のかつらを作るには30人分の頭髮寄付が必要。そのため、「もっと多くの人々に参



頭髮寄付してくれた人にお礼の手紙を書くのも大切な活動のひとつ。送料などの経費は、同好会の活動に賛同した人々から厚意で寄せられた寄付金でやりくりしている

加してもらえよう、活動を広めていきたいです」と、真莉愛さんは呼びかける。病氣と闘う子どもたちに、医療用かつらを贈りたい。高校生たちの熱い思いが、一人でも多くの子どもたちに届くよう、これからも見守り続けたい。

## Information

〒373-0813 太田市内ヶ島町 1361-4  
ぐんま国際アカデミー  
女子高校生ヘアドネーション同好会  
E-mail / hairforchildren@gmail.com

フリモARアプリをダウンロード



※AppleおよびAppleロゴは米国その他の登録されたApple Inc. の商標です。  
App StoreはApple Inc. のサービスマークです。  
※Google Play および Google Play ロゴは Google Inc. の商標です

文 / 佐藤京子 写真 / 篠原亨 デザイン / 伊藤剛志